現代名詩選（上）

伊藤信吉編

新潮文

現代名詩選
上巻

定価280円

新潮文庫 草205 A

昭和四十四年八月二十五日 発行
昭和五十六年五月十五日 十八刷

編者 伊藤信吉
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四四〇
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊟ 印刷・株式会社金羊社　製本・憲専堂製本株式会社
© Shinchôsha 1969　Printed in Japan

新潮文庫

現代名詩選

上巻

伊藤信吉編

新潮社版

1889

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

島崎藤村……九
土井晚翠……三
与謝野鉄幹……三六
与謝野晶子……四二
河井酔茗……四八
伊良子清白……五三
薄田泣菫……五五
蒲原有明……六三
石川啄木……七八
北原白秋……九八
三木露風……一三
木下杢太郎……一三五
高村光太郎……一四六

川路柳虹……一七一
野口米次郎……一七六
福士幸次郎……一八六
山村暮鳥……一九五
武者小路実篤……二〇九
千家元麿……二二五
白鳥省吾……二三七
百田宗治……二四〇
福田正夫……二五三
大手拓次……二五九
三富朽葉……二七三
竹内勝太郎……二七九
解説　伊藤信吉

現代名詩選

上巻

島崎藤村

明五・二（一八七二）――昭一八・八（一九四三）　本名春樹。長野県馬籠村に生る。明治学院卒。北村透谷を中心とする「文学界」に拠って詩その他を発表。明治二九年東北学院教師となって仙台に赴任し、そこでの詩作をまとめて三〇年『若菜集』を刊行。ほぼ一年の仙台生活を終えて上京、『一葉舟』『夏草』を刊行。次いで小諸義塾教師となって信州小諸町へ赴き『落梅集』を刊行。小説に転じて『破戒』『春』『家』『新生』『夜明け前』等を出した。

初恋

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

白壁

たれかしるらん花ちかき
高楼われはのぼりゆき
みだれて熱きくるしみを
うつしいでけり白壁に

唾にしるせし文字なれば
ひとしれずこそ乾きけれ
あゝあゝ白き白壁に
わがうれひありなみだあり

潮音

わきてながるゝ
やほじほの
そこにいざよふ
うみの琴
しらべもふかし
もゝかはの
よろづのなみを
よびあつめ
ときみちくれば
うらゝかに
とほくきこゆる
はるのしほのね

草枕

夕波くらく啼く千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋に
なぐさめもなくなげきわび
胸の氷のむすぼれて
とけて涙となりにけり

蘆葉を洗ふ白波の
流れて巖を出づるごと
思ひあまりて草枕
まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の
なきなぐさめを尋ね侘び
道なき森に分け入りて
などなき道をもとむらん

われもそれかやうれひかや
野末に山に谷陰に
見るよしもなき朝夕の
光もなくて秋暮れぬ

想も薄く身も暗く
残れる秋の花を見て
行へもしらず流れ行く
水に涙の落つるかな

身を朝雲にたとふれば
ゆふべの雲の雨となり
身を夕雨にたとふれば
あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして
風に吹かれて飄り
朝の黄雲にともなはれ

夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ乱れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿の宮城野よ
乱れて熱き吾身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴と聴き
悲しみ深き吾目には
色彩なき石も花と見き

あゝ孤独の悲痛を
味ひ知れる人ならで
誰にかたらん冬の日の
かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば
空冬雲に覆はれて
身にふりかゝる玉霰
袖の氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風勁く
小川の水の薄氷
氷のしたに音するは
流れて海に行く水か

啼いて羽風もたのもしく
雲に隠るゝかさゝぎよ

光もうすき寒空の
汝も荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日の
光もなくて暮れ行けば
人めも草も枯れはてゝ
ひとりさまよふ吾身かな

かなしや酔ふて行く人の
踏めばくづるゝ霜柱
なにを酔ひ泣く忍び音に
声もあはれのその歌は

うれしや物の音を弾きて
野末をかよふ人の子よ
声調ひく手も凍りはて
なに門づけの身の果ぞ

やさしや年もうら若く
まだ初恋のまじりなく
手に手をとりて行く人よ
なにを隠るゝその姿

野のさみしさに堪へかねて
霜と霜との枯草の
道なき道をふみわけて
きたれば寒し冬の海

朝は海辺の石の上に
こしうちかけてふるさとの
都のかたを望めども
おとなふものは濤ばかり

暮はさみしき荒磯の

潮を染めし砂に伏し
日の入るかたをながむれど
湧きくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の
岩に砕けて散れるとき
かなしいかなや冬の日の
潮とともに帰るとき

誰か波路を望み見て
そのふるさとを慕はざる
誰か潮の行くを見て
この人の世を惜まざる

暦もあらぬ荒磯の
砂路にひとりさまよへば
みぞれまじりの雨雲の
落ちて潮となりにけり

遠く湧きくる海の音
慣れてさみしき吾耳に
怪しやもるゝものの音は
まだうらわかき野路の鳥

嗚呼めづらしのしらべぞと
声のゆくへをたづぬれば
緑の羽もまだ弱き
それも初音か鶯の

春きにけらし春よ春
まだ白雪の積れども
若菜の萌えて色青き
こゝちこそすれ砂の上に

春きにけらし春よ春
うれしや風に送られて
きたるらしとや思へばか
梅が香ぞする海の辺に

磯辺に高き大巌の
うへにのぼりてながむれば
春やきぬらん東雲の
潮の音遠き朝ぼらけ

高楼

わかれゆくひとををしむとこよひより
とほきゆめちにわれやまとはん

妹

とほきわかれに
たへかねて
このたかどのに
のぼるかな

かなしむなかれ
わがあねよ
たびのころもを
とゝのへよ

姉

わかれといへば
むかしより
このひとのよの
つねなるを

ながるゝみづを
ながむれば

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com